

京大・財政学研究会での宮本先生の講演

財政学研究会に参加するために、久しぶりに京都大学のキャンパスに行った。時計台や講義・研究棟なども整備されていた。この日は京都駅から東山界限、そして哲学の道や吉田山を経てキャンパスに到達したが、疲れを吹き飛ばしてくれるような研究会であった。長い歴史をもつ京大・財政学研究会恒例の新しく入学した院生歓迎行事である。今回は宮本憲一先生が「私の財政学研究史の断面」と題して2時間近くにわたって講演された。

先生のレジュメは、1 財政学から共同社会的条件の政治経済学へ、2 日本財政学の到達点、3 財政学と公共政策論---国家論・市民的公共性・社会的使用価値という構成である。



じつに多岐にわたる刺激的な内容であったが、とくに次の点が印象に残った。戦前の日本財政学の到達点として大内兵衛『財政学大綱』をあげ、そのなかの「政治と経済の関係」などが紹介された。この財政学の課題が、戦後に島恭彦『財政学概論』に引き継がれていった。大学院のゼミで『財政学概論』をテキストに使ったことがあり、難解なので繰り返し読んで報告したことがある。第1章の財政学の対象と方法のところにある

「政治と経済との矛盾」

について質問したことを覚えている。先生の講演を聞きながら、緊張感に包まれながら、自由に質



問して議論した宮本ゼミのことを懐かしく思い出した。

また、神野直彦『財政学』の評価とも関連づけて、国家論の重要性、社会的使用価値やグローバル化下の国民国家の役割についても興味深い指摘があった。日ごろの勉強不足を痛感させられたが、財政学さらには公共事業研究についても多くの示唆を与えることができた講演であった。

(2006年5月7日 記)